

国際経済における均衡：リカードゥの問題提起とその解答

鳴瀬，成洋

<https://doi.org/10.15017/2920613>

出版情報：経済論究. 51, pp.75-108, 1981-06-27. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：



国際経済における均衡

——リカードの問題提起とその解答——

鳴 瀬 成 洋

目 次

序

- I. 初期の国際金移動論
 - 1. 『地金高価論』におけるソーントン批判
 - 2. 国際金移動論
- II. 『経済学原理』における specie flow mechanism
 - 1. 比較生産費理論と specie flow mechanism
 - 2. 「異なった国々における貨幣の価値」について
 - 3. 貨幣の価値と為替相場
- III. リカード外国貿易論の核心
 - 1. リカード外国貿易論の核心
 - 2. リカード外国貿易論の構成
 - 3. J.S.ミルによる変型
- IV. 国際経済における均衡
 - 1. 外国貿易と利潤率
 - 2. 国際経済における均衡

序

リカード『経済学原理』(*On the Principles of Political Economy and Taxation*) は単なる価値論に基づく三階級・三分配論としてではなく、資本蓄積論の体系として理解されるべきことは、多くの研究によって承認を得ている。彼の問題関心は、資本蓄積の動因たる一般的利潤率の法則的確定にあり、そのために、投下労働価値論への価値論の純化がなされた¹⁾。そして価値論を基礎として、資本蓄積の進展に伴い、穀物価格が騰貴し賃銀が上昇する結果生じる一般的利潤率の長期的傾向として描き出されたものが、「富源の終焉」

(the end of resources) あるいは「静止状態」(stationary state)である。ここで、リカードゥは、様々な攪乱要因を捨象した自然価格の世界を分析の対象とし、一般的利潤率の確定とその長期的傾向の導出を行っているのである。「われわれは、これらの偶然的原因とはまったく無関係な結果である自然価格、自然賃銀および自然利潤を左右する法則をとり扱っているかぎり、偶然的原因による効果を完全に考慮外におくであろう」(I, p. 92)²⁾。

ブルジョア社会の内部構造の解明を目的としたマルクスについても同様のことが言える。すなわち、彼が分析の対象としたのは、市場価格の循環的変動の中から抽象された価値価格の一致した「理想的平均」の世界であり、そこで彼は、最も基礎的な範疇として「価値」を析出し、それに基づいて剰余価値論を確立し、剰余価値が収入諸範疇に分解していく過程で、収入とその源泉との関連が見失われ、資本—利子、土地—地代、労働—労賃というブルジョア的観念が固定化されることの批判にまで上向しているのである。リカードゥ、マルクスとも、自然価格あるいは価値価格一致という均衡の世界を分析の対象として設定し、そこに貫く傾向法則あるいは資本主義の内部構造を示している。

このような国民経済内部の分析に対して、国際経済を分析する場合の困難は、そこでは国民経済と国民経済との関係が問題となることにある。資本主義固有の経済法則は、国民経済内部にだけでなく、国民経済相互間においても存在し、そのような法則を解明しようとするならば、国際経済における何らかの均衡が出発点において想定されねばならない。ところが、国民経済の複合体として成る世界市場には、一国内部においては可能であった単一座標軸は設定されえないのであり(後述)、従って価値価格一致というような姿で均衡の世界を想定することができないことから困難が生じる、——では国民経済に特徴的な概念によって、いかなる姿で国民経済相互間の均衡を想定するか、という困難が。

このような問題意識は、古典派貿易論における specie flow mechanism あるいは貴金属の国際的均衡配分論にまで遡ることができ、国際価値論も、同様の問題を根底に有していると考える。そこで本稿の第一の課題は、リカードゥの specie flow mechanism についてのオリジナルな思考を追跡することにあ

る。リカードゥ外国貿易論は、比較生産費理論という大きな遺産と結びつけて語られるとともに、他方では貨幣数量説という烙印を押されている。比較生産費理論についてのリカードゥの本来の思考は、故行沢健三氏によって見事に再現された³⁾。しかし、specie flow mechanism の真意についてはこれまで十分な理解がなされているとは思われない。彼が specie flow mechanism によって提起した問題は「国際経済における均衡」なのであり、この問題に対し、リカードゥは自ら貨幣数量説でもって答えたのであるが、彼の解答に対して貨幣数量説という俗流経済学の代名詞を与えることで満足し、その問題意識までも葬り去ってしまうことはできないはずである。また本稿では、specie flow mechanism についての彼の思考の原型を再現するだけでなく、その問題意識がいかにマルクス、さらには国際価値論へと受継がれたかについても言及したい。

- [注] 1) リカードゥ体系の核心は利潤という分配範疇の確立にあり、価値論はそのための手段である、という把握は中村広治氏に最も鮮明にみられる。中村広治『リカードゥ体系』ミネルヴァ書房、1975年、191頁。
- 2) リカードゥからの引用は、*The Works and Correspondence of David Ricardo* ed. by Piero Sraffa, 10 vols., Cambridge, 1951—55. 『リカードゥ全集』（雄松堂書店）に拠り、巻数、原ページのみを記す。
- 3) 行沢健三「リカードゥ「比較生産費説」の原型理解と変型理解」『商学論纂』第15巻第6号、1974年1月、同「古典派貿易論の形成」行沢他編『社会科学の方法と歴史』ミネルヴァ書房、1978年10月。

I. 初期の国際金移動論

1. 『地金高価論』におけるソーントン批判

『地金高価論』(*The High Price of Bullion, A Proof of the Depreciation of Bank Notes*) 冒頭の貴金属の国際的均衡配分の命題は単なる抽象論としてではなく、1797年から1821年までの Bank Restriction Act の下で起こった鑄造価格を上回る金の市場価格の騰貴、金輸送費を越える為替相場の変動、金の流出という異常な事態の原因をめぐる論争の中で形成されたものである。この論争は地金論争として知られているが、その最大の争点は過剰発行によるイ

ングランド銀行券の減価を認めるか否かにあった。リカドゥが通貨の混乱をイングランド銀行券の減価に帰したのに対して、ソーントンはその原因を不利な貿易差額に求めた。不利な貿易差額とそれがもたらす輸出のための金需要の増大によって、為替相場下落と金の市場価格騰貴を説明するのがソーントンの議論のエッセンスである¹⁾。

リカドゥはこれに次の二点から反論する。まず需要増大が金の市場価格を騰貴させたという考えに対して、「このような推論の誤りは、金の価値における上昇と金の貨幣価格における騰貴を区別しないことから生まれるのである」

(Ⅲ, p. 60) と批判する。需要増大によって上昇するのは金の価値である、と言うのだが、その含意はこうである。銀行券の減価が存在するときには銀行券は金に対して割引かれている。つまり一定量の金に対してより多くの銀行券が与えられるが、このとき価値が変化したのは金ではなく銀行券である。それは諸商品と比較することによってわかる 3 ポンド 17 シリング 10½ ペンスに値する金を諸商品と比較すれば、減価以前と同じ比率を維持している。つまり金はこれまでと同じ量の商品を購入しうる。だが銀行券はそうではない。これまでと同じ量の商品を購入しうるには 3 ポンド 17 シリング 10½ ペンス以上の銀行券が必要である。金の価値は諸商品との比較によって確められる。銀行券の減価によって金の市場価格が上昇しても金はより多くの商品を購入しうるわけではなく、金の価値は不変である。だが金に対する需要が増大すれば、金と諸商品の関係は変化する。金はより多くの商品を購入することができ、金の価値は上昇する (cf, Ⅲ, p. 22, p. 80)。このような区別に基いてリカドゥは、需要増大によって金の市場価格の上昇を説明する考えを排けるのである。次に、不利な貿易差額が不利な為替相場を説明するという考えを批判して言う。不利な貿易差額が為替相場に及ぼす影響は金輸送費の範囲内に留まり、それを超える為替相場の逆調は、流通媒介物の減価に帰せられねばならない、と (Ⅲ, p. 83)。

ここで注意すべき点は、需要増大によって上昇するのは金の価値である、とリカドゥが言うとき、金の商品に対する購買力が判定基準とされていることである。貴金属の国際的均衡配分論もこの概念を基軸にして展開される。

[注] 1) ソートンの考えを最もよく表わしている一節を挙げる。「貿易差額が非常に不利なとき（これはスミス博士が全く考慮に入れなかった出来事である）には、紙券の過剰と呼ばれるものがもしあったとしても、それは金の鑄造価格を上回る市場価格の超過の存在を防止するために、そこまで引き下げられるべき甚だ低く圧縮された量を越えた部分にすぎないことがありうると考えられる。それ故に、わたくしの考えでは、このような（鑄造価格を上回る金の市場価格の）超過が、もし貿易差額の不利な際に現われたとすれば、かつまた銀行券の異常な発行が行われなかったときに起こったとすれば、たとえそれが銀行券の収縮によって矯正されるような超過であるとしても、この超過はその不利な貿易差額によって創り出された超過であるとみなされても正当だと思う」（H. Thornton, *An Enquiry into the Nature and Effects of the Paper Credit of Great Britain*, 1802: in J. R. McCulloch, *A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts and Other Publications on Paper Currency and Banking*, 1857, p. 220. 渡辺佐平・杉本俊郎訳『紙券信用論』実業之日本社、1948年、144頁、〔 〕内引用者、なお訳は必ずしも従わない）。不利な貿易差額が存在すれば、決済のための金に対する需要が増大し、鑄造価格を上回る金の市場価格が現われる。このような金の市場価格の上昇は、過剰な銀行券を大量に縮小することによって商品を低廉にし、貿易差額の不利化を阻止し、金の輸出を防ぐことによって是正することができる（同書、原文 p. 221, 訳146頁）ものであったとしても、そのような銀行券の過剰が存在せず、不利な貿易差額が存在するときに金の市場価格の上昇が現われたとすれば、その原因は不利な貿易差額に帰せられるべきである、というのがソートンの考えである。そして彼は、銀行券の過剰発行が行われなかったことをボイト (Walter Boyd) 批判として述べている（同書、原文 pp. 282—283, 訳231—233頁）。

2. 国際金移動論

ソートンを以上のように批判するリカードゥは、金流出、為替相場下落について、それに代わる説明原理を用意しなければならない。彼の目的は、混乱の原因は通貨の過剰であることを明かにすることであり、貴金属の国際的均衡配分論もそのための理論である。そしてその基軸となるのは「貨幣の価値」という概念である。

「経済学についてもっとも定評のある著者たちは、次のように想定してきた。すなわち、世界の諸商品を流通させるために使用されてきたもろもろの貴金属は、銀行が設立される以前に、すでにそれらの国々の商業や富の状態、およびそれらにともなってそれ

らの国々がおこなわねばならなかった諸支払の額やその度数におうじて、地球上の異なった文明諸国民のあいだにある比率で分配されたということ、これである。そのように分配されるかぎり、それらの貴金属はどこにおいても等しい価値を有し、また実際に使用される貴金属への各国の必要度は同じであったから、いずれの国においても、それらの輸入もしくは輸出にたいする誘因はまったく生ずるはずがなかったのである」(Ⅲ, p. 52)。

ここでまず問題になるのは「貴金属の価値」ならびにその国際的同一の内容である。これについて田中素香氏は、第一に、この叙述に続いて貨幣の内在的価値の規定が述べられていること、第二に、リカドゥは一つの平均としての貨幣の購買力ないし物価水準という概念に対して終始否定的であったことを理由に、貨幣の価値を貨幣の購買力とみる通説を排し、貴金属の価値が国際的に同一であることを次のように規定される。「金の移動を規定するのは、リカドゥにあってはあいまいな物価水準ではなく、個々の輸出可能商品で測られた金の価値なのであるから、[金の価値の国際的同一とは] この意味での金の価値が同一である場合、換言すれば、輸出可能商品の金価格が国際的にことごとく同一である場合、である。マルサス宛の書簡の一節はそれを裏付けている。／「ある二国で貨幣が同じ価値をもっていた場合、すなわち二国の輸出可能商品はすべて例外なく両国で同じ価格をもっていた場合……」(Ⅵ, p. 37) ¹⁾。

確かに田中氏が言われるように、リカドゥは貨幣の価値を測定する基準として商品総体を否定し、意味を付されたのは個々の商品で測った貨幣の価値であるが、それは、不変の価値尺度たる商品は存在しないという考えに基いている²⁾。だがむしろ、国際金移動論のエッセンスは、「貨幣の購買力」(個々の商品に対するという限定を付した、以下同)という概念を基軸に構成されている点に見出されるべきである。というのは、これを基軸にすることによって最も有効にソーントンに対抗しうるからである。リカドゥは貨幣の内在的価値を想定するが、それは事実上稀少性によって決定される。内在的価値は直接把握されるものではなく、商品との交換関係を通じて経験的に把握されるものである。国際金移動論において意味をもつのは、この商品との関係における貨幣の価値、すなわち「貨幣の購買力」である。そして稀少性による価値規定に依

抛するならば、「貨幣の購買力」は流通にある商品と貨幣の相対的割合によって決定される。そうすると国際間の均衡状態として描かれる貨幣価値の国際的同一の内容は、商品の側に変化がないとすれば、貴金属が諸国に分配される比率が同一であることに拡大される。

「貨幣として使用される世界の金および銀の分量が仮にはなほ少なくとも、もしくはありあまるほど多くても、そのことは、異なった国々にそれらが分配されるであろう比率に、すこしも影響をおよぼさないであろう——すなわち、貴金属の分量における変動は、それらと交換される諸商品を相対的に高価にもしくは安価にする以外の影響を、まったく生み出さないであろう」（Ⅲ, p. 53）。

金の移動は、商品あるいは貨幣の側に国際間で不均等な変化が生じたとき、このような均衡的な貴金属の配分比率を回復するために起こる。貴金属の配分比率によって貨幣の購買力は規定されるので、これはまた、貨幣の購買力の均衡を実現する過程でもある。貨幣の側に変化がないとき、一国が他国よりも急速に富を増大させるならば、商品の内在的価値は低下する。その結果輸出品の価格は低下し、輸出増加、貨幣流入によって世界の貨幣の均衡的配分が実現される。富の一部を喪失する場合には逆のプロセスが生じる。また貨幣の側からの変化によっても金の移動は起こる。ある国で金鉱山が発見されるならば、流通に投じられる金の分量が増加し、通貨の価値は低下する。その結果金はいくつもの商品で測られた価値が低下した国から、その高い国へと流れてゆく。そして均衡は、金鉱山の発見以前の貨幣配分の比率が確立されたときに再び実現される。同様のことは銀行券の過剰発行によって流通媒介物の価値が低下したときにも起こる。均衡は価値の低下した貨幣の一部を輸出することによって回復される（Ⅲ, pp. 53—55）。

ここで再度確認すると、貴金属の国際的均衡配分論の中核となる概念は「貨幣の購買力」である。だからこそリカードは、貨幣側の変化による金移動について述べるとき、金鉱山の発見によって流通内の金の分量が増加する場合と、銀行券が大量に発行される場合とを、ともに通貨の価値の低下と捉え、それが金移動の起動力である、と統一的に主張したのである。つまり彼は、新金鉱山の発見という貨幣の内在的価値そのものを変化させる要因と、それを所

与として考察すべき、銀行券の過剰発行による通貨の減価という問題を区別していないのである。前者の場合には稀少性による価値規定に依拠する限り、貨幣の内在的価値が変化するのだが、後者の場合には、問題となるのは代表金量（価格の尺度標準）の変化である。だが両者はともに貨幣の商品に対する購買力の変化として現象する。そしてリカードゥが貴金属の国際均衡配分において意味を付したのは、貨幣の内在的価値あるいは価格の尺度標準の変化という区別を捨象したそれらの迂回的表現たる「貨幣の購買力」すなわち「通貨の価値」であり、その格差によって金の移動は起こる。そして「貨幣の購買力」は、商品と貨幣の相対的割合によって決定される。従って貨幣価値の国際的同一という均衡の内容は、世界の貨幣が国々へ配分される比率の同一へと拡大、解消される。リカードゥ自身このことを次のように確認している。

「だからこの場合、次のことのように思われる。すなわち、貴金属の分量が同一であるかぎり、一国の通貨がある期間にわたって他国のそれよりももっと大なる価値を有することは決してありえないということ、また通貨の過剰とは相対的な言葉にすぎないということ、さらにまた、もしもイギリスの通貨が1000万、フランスのそれが500万、オランダのそれが400万、等々であるならば、それらの国々がおのおのその比率を維持するかぎり、たとえ各国の通貨が二倍もしくは三倍になったとしても、いずれの国も通貨の過剰に気づくことはないであろう、ということ、これである。通貨の増加の結果、諸商品の価格はいずれの国においても騰貴するであろう。しかしいずれの国からも貨幣の輸出はまったくおこなわれないであろう。しかし、仮にイギリスだけがその通貨を倍加するが、フランス、オランダ、等々の国の通貨がひきつづき以前と同じであることによってこれらの比率が破壊されるとしたら、その時にはわれわれはわが国の通貨の過剰に気がつき、またこれと同じ理由によって、ほかの国々も自国の通貨の不足を感じるであろう。そしてわが国の過剰な通貨は、10、5、4、等々のおのおのの比率がふたたび確立されるまで、輸出されるであろう」（Ⅲ，pp. 56—57）。

こうしてリカードゥの描く均衡状態は国々への貨幣配分の比率の問題に解消されるが、ブレイク（William Blake）はこのような考えを「通貨の世界的水準」（the universal level of currency）論と呼び、その内容を次の三点にまとめたうえで批判する。(1)正貨は、他の国の通貨と比較して正貨の価値が劣っている結果として、正貨の価値が低下している（depreciated）国を離れる。(2)他

の諸国の通貨が同じ割合で減価したならば、(正貨の)輸出に伴う利益はない(従って正貨の移動はない)。(3)通貨が全世界にわたり比例的に増加するならば、物価は世界的に(universally)無限に上昇する。これに対してブレイクは、地金の輸出は他の国々の通貨の価値とは何の関係もなく、それはもっぱら鑄貨の形態での金と地金の形態での金との相対的価値から起こる、と批判する³⁾。ここでブレイクが念頭に置いているのは前出のリカドゥの叙述(Ⅲ, pp. 56—57)であることは明かである。すなわち、リカドゥは、各国の通貨量が比例的に二倍、三倍となったとき、諸商品の価格は騰貴するが、各国の通貨の相対的割合は変わらず、従って「貨幣の購買力」の格差は生じないのだから金の移動は起こらない、と言うのに対して、ブレイクは、金の輸出は他の国々の通貨の状態とは関係なく、その国内部の問題である、つまり銀行券の過剰発行のために鑄貨形態での金の価値が地金形態での金の価値よりも小さくなる(減価)結果起こるのだ、と批判するのであるが、これは全面的に首肯される。

しかしながらリカドゥは、このような批判にもかかわらず、「金の価格」(“The Price of Gold, Three Contributions to the *Morning Chronicle*”)においては、金の輸出あるいは地金市場への排出の原因は、銀行券の過剰発行によって起こる、一国の鑄貨あるいは銀行券の価値と地金の価値の乖離であることを明確に認識している(Ⅲ, pp. 15—16)。それにもかかわらず、彼が『地金高価論』において金の国際移動の原理として貨幣配分の国際的比率を提示したのは、凶作による輸入増加の結果たる不利な貿易差額によって金の流出を説明するソーントンの主張をも自己の理論の枠内に包摂するという意図があったからである。リカドゥの問題関心は兌換停止下での通貨の混乱という現実であり、彼はその原因をイングランド銀行券の過剰発行に求めた。それだけでなく彼は、混乱の原因は不利な貿易差額にあるとする主張に対抗しなければならず、その必要から貴金属の国際的均衡配分の命題が提示されたのである。つまり、貨幣の購買力を理論の中心に据えることによって、リカドゥは、不利な貿易差額によって起こる金の流出は、凶作によって国富の一部が失われ貨幣が相対的に過剰となることによって、貨幣の価値すなわち購買力が低下し、それが最も有利な輸出商品となり、穀物と交換に輸出される、という自己の考

えの異なる表現にすぎないと主張しえたのである（Ⅲ，pp. 106—107）。しかしそれはブレイクから批判を蒙ったように、金移動の原理を「貨幣の購買力」へと解消することによって可能となった。言い換えれば、この命題は、通貨の混乱の原因を不換銀行券の過剰発行に求めるリカードゥ自身の主張と、不利な貿易差額に原因を求めるソーントンの主張の両方を包摂する器なのであり、従って、「貨幣の購買力」，「貨幣の相対的過剰」という幅広い概念を基軸に構成されているのである。

〔注〕 1) 田中素香「リカードゥの為替相場論」（上）『下関商経論集』第20巻第2号，1976年11月，43頁。力点田中氏，〔 〕内引用者。

2) この点については詳論しておく。通貨の価値は本位として使用される貴金属の産出に必要な労働量の変化によって、あるいは銀行券の過剰発行に由来する減価によって変化するが、それが確められるのは商品との交換関係においてである。不変の価値尺度が存在すれば、通貨の価値の変化はその商品との比較によって確定されるが、そのような価値不変の商品は存在せず、生産の難易により、ある商品は価値において上昇し、他の商品は価値において低下するとき、通貨の価値はある商品と比較すれば低下し、他の商品と比較すれば上昇するようになる。このようなときに商品総体によって貨幣の価値を測ることは全く無意味であり、意味あるのは個々の商品によって測定された貨幣の価値である（Ⅳ，p. 59）。以上は労働価値論確立後のリカードゥの思考であるが、同様の考えは『地金高価論』においても保持されているとみるべきであろう。生産に必要な労働量が不変である商品が存在しないように、稀少性において不変である商品も存在しないことから、稀少性による価値規定に基きながらも、意味あるのは個々の商品で測った貨幣の価値であることを主張しえたと考えられる。

3) William Blake, *Observations on the Principles which Regulate the Course of Exchange; and on the Present Depreciated State of Currency*, 1810, : in John R. McCulloch, *op. cit.*, pp. 513—514.

Ⅱ. 『経済学原理』における specie flow mechanism

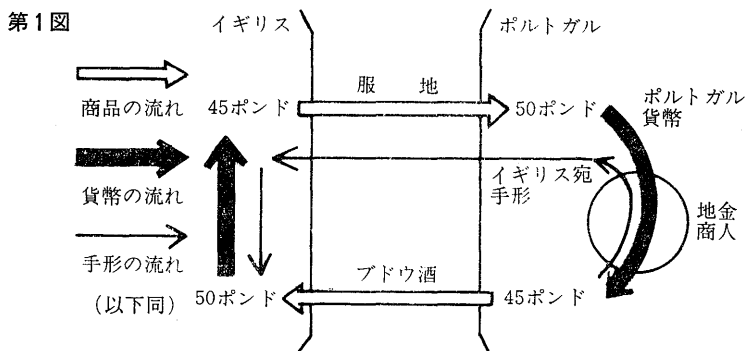
兌換停止下での通貨の混乱という現実からの抽象によって形成された国際金移動論の注目すべき問題提起は、国際間に何らかの均衡を見出す考えである。このような問題意識は、『経済学原理』の specie flow mechanism にも存在する。本節ではそのオリジナルな思考を、(1)比較生産費理論と specie flow

mechanism の関係について、(2)「異なった国々における貨幣の価値」の問題について、(3)貨幣の価値と為替相場が区別されていることについて、の順で追跡する。

1. 比較生産費理論と specie flow mechanism

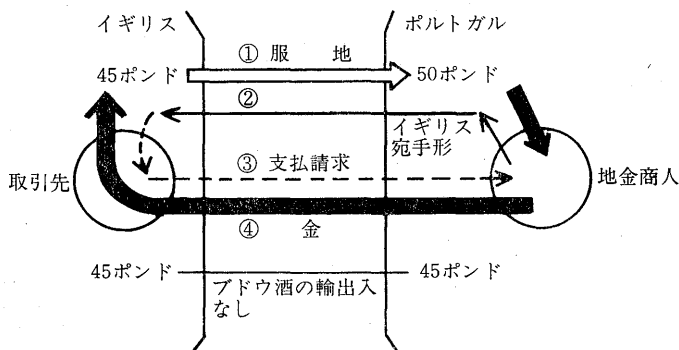
投下労働量タームで比較生産費理論を示した後、リカードゥは貨幣を導入して specie flow mechanism の叙述に移る。比較生産費理論は、国際間に一定の生産力の絶対的相対的格差があるとき、どのような国際分業を行うことが使用価値的に最も有利であるかを教える。仮定された状況下でイギリスが服地を、ポルトガルがブドウ酒を生産するのは、それが両国にとって最も有利だからである。ところが、イギリスでブドウ酒醸造の改良がなされ、貿易を行うよりも、ブドウ酒、服地とも国内で生産する方が有利となれば、金移動による価格変化を介して、そのような分業が新たに形成される。リカードゥは、生産力の状態が変化したとき、それに対応した最も有利な分業（貿易の停止さらには業務の交換）が実現されることを、specie flow mechanism によって説明するのである。

彼はその作用を具体的な数字をあげて述べる。イギリスでブドウ酒一樽の価格が50ポンド、服地一定量の価格が45ポンド、ポルトガルではそれぞれ45ポンド、50ポンドであれば、相方の国から服地、ブドウ酒が5ポンドの利潤を伴って輸出される。ポルトガルの服地輸入者は、地金商人を介してブドウ酒輸出者の振出したイギリス宛手形を購入することによって債務を弁償する。このときには「貨幣がいずれの国からも流出することなしに、各国の輸出業者は彼らの財貨にたいして支払いを受ける」（I, pp. 138—139）（第1図）。



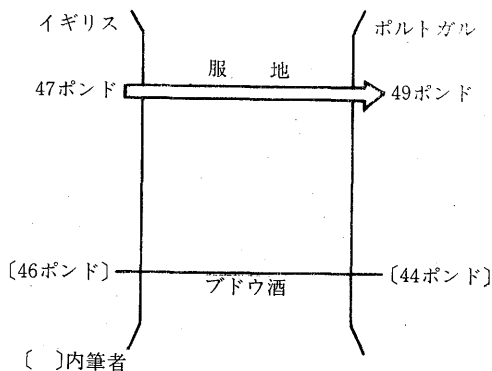
ところがイギリスにおけるブドウ酒生産の改良の結果、ブドウ酒価格が45ポンドに下落したらどうなるか。ブドウ酒はイギリスへ輸出されないが、服地はポルトガルへ輸入されるので、ポルトガルの服地輸入者は債務弁償のためにイギリス宛手形を求める。しかしポルトガルは輸出商品を持たず、出合手形が存在しないため、イギリス宛手形の売手たる地金商人は、服地輸出者から自分あるいは取引先に対してなされる支払請求に応じうるようにしておかねばならない。それ故彼は、手形に対して通常の利潤とともに金輸送経費を要求し、イギリス宛手形に対してプレミアムがつく。しかし貿易の利潤（5ポンド）がイギリス宛手形のプレミアム（例えば2%）より大きい限り、服地はポルトガルへ輸入され、金はイギリスへ移動する（第2図）。その結果、貨幣の価値はポルトガルでは上昇し、イギリスでは下落する。貨幣の価値の変化は両国のすべて

第2図



の商品の価格に影響する。服地とブドウ酒の価格はイギリスでは上昇し、ポル

第3図



トガルでは下落する（例えば第3図のように）。服地の新たな価格差によって獲得される利潤がイギリス宛手形のプレミアムに等しくなれば、商人にとって貿易を行う誘因はなくなる。〔従って貿易は行われず、手形の需要もなくなり、為替相場は平価に戻る〕（I, pp. 139—140）。以上がリカドゥの本来の推論である（〔 〕内筆者）が、次のような疑問が残る。貨幣価値が変化して第3図のような価格関係になれば、ブドウ酒はポルトガルからイギリスへ輸出され、第1図のようにして決済が行われ、相互貿易が続けられるはずである。ところがリカドゥは、イギリスのブドウ酒醸造の改良によってブドウ酒の取引は停止されるものとしてはじめから処理し、議論を服地の取引が停止されるプロセスに絞っている。だからこのような問題は看過されたのであろう。

だが重要なのは提起された問題である。外国貿易についてのリカドゥの基本的立場は、不等労働量交換というという注目すべき叙述はあるものの、外国貿易を価値従って利潤率には関わりのない使用価値上の問題に限ることである。その結果、国際分業による社会的労働の節約という枠の中でのみ彼の思考は展開し、比較生産費理論へと集約される。そして、外国貿易が「有利な物々貿易」の遂行という自然な経路から乖離したとき、それを調整するものとして、*specie flow mechanism* が導入される。イギリスが服地を、ポルトガルがブドウ酒を生産し輸出することが生産力格差に対応した有利な物々貿易であるときには、金の移動はなく、現在の取引を継続させるような価格関係が維持される、という仕方で *specie flow mechanism* が作用する。イギリスにおける生産力の変化により、服地、ブドウ酒とも国内で生産することが使用価値的に有利となれば、貿易を停止させるべく *specie flow mechanism* が働く。またどちらか一方の国の生産物に租税が課されたとしよう。しかし、「すべての国産物の価格をひき上げる効果をもつであろう租税は、きわめて限られた期間を除けば、輸出を阻害しないであろう」。というのは、金の移動によって、これまでの貿易を回復させるような価格関係が再び形成されるからである（I, pp. 169—170）。以上より次のことが言える。リカドゥは、国際間の生産力格差に対応した、使用価値的に最も利益のある国際分業が営まれている状態を、国際間における均衡と考えており、生産力が変化したとき、このような均

衡を実現する機構として specie flow mechanism が存在する。すなわち、国際間における生産力の不均等な変化とその調整、これが specie flow mechanism が提起した問題である。

2. 「異なった国々における貨幣の価値」について

このように、国際間の生産力の変化に対応して新たな国際分業が形成されるが、それは、金の国際移動によって各国の貨幣価値に差異が生じることによって実現される。そこで次にリカードゥは貨幣価値の変化の内容を問題にする。

「本書の前の部分では、議論のために、貨幣はつねにひきつづいて同じ価値をもつものと仮定してきた。いまわれわれは、貨幣の価値の通常の変動および全商業世界に共通な変動のほかに、特定の国々で貨幣がこうむる部分的変動もあるということ、そして事実上、貨幣の価値は、現にそうであるように相対的課税に、製造上の熟練に、気候、自然の産物、およびその他多くの原因にもとづく利点に依存しているのであるから、どの二国においてもけって同一ではない、ということを証明しようと試みているのである」(I, p. 143)。

リカードゥは、貨幣価値の通常の変動および全世界に共通な変動のほかに特定の国々における部分的変動の存在を言うが、これは、「異なった国々における貨幣の価値」は社会の初期の状態では鉱山からの距離に左右され、発展した社会では製造業の優秀度に左右される (I, p. 144) ということと内容的に同じである。つまり、産金国における金産出労働の生産力が上昇すれば、その国における貨幣の価値が低下する (通常の変動) だけでなく、金は他のすべての諸国でより少い商品と交換され、全世界に共通な貨幣価値の変動が生じる。しかしこのような原因とは別に、特定の国が製造業においてすぐれ、それが貿易に反映し金が流入する場合には、その国の貨幣の価値は他の諸国よりも低くなり、商品価格は相対的に高くなる。これが「特定の国々で貨幣がこうむる部分的変動」である。

リカードゥは価値論の展開に当り、商品の側の変化と貨幣の側の変化を区別し、specie flow mechanism を提示するまでは、貨幣の価値を不変とし、価格変化はすべて商品の価値の変化によるものと仮定している。これに対して specie flow mechanism は、生産力の変化に対応して貨幣価値が変化するこ

とによって遂行される調整過程である¹⁾。そしてここで最も重要な点は、この調整過程を担う貨幣価値の変化は、金産出労働の生産力の変化による貨幣価値の通常の変動および全世界に共通な変動とは区別された特定の国々における部分的変動である、ということである。リカードゥは、使用価値的に最も利益のある国際分業の形成をもって「国際経済における均衡」とし、均衡を実現する機構として *specie flow mechanism* を考える。つまり、国際間で生産力の不均等な変化があれば、それが貿易に影響し、金の移動が生じ、生産力の変化に対応して貨幣価値が変化することによって、新たな均衡が実現される。そしてこのとき生じるのは、他の二者とは区別された「特定の国々で貨幣がこうむる部分的変動」なのである。リカードゥはこのようにして国際間における均衡が実現されると考えており、貨幣価値の部分的変動が生じるメカニズムを、諸国が貨幣を吸収する度合すなわち貨幣数量説で説明するのである。

マルクスは、リカードゥは金の価値をそれに対象化された労働時間によって規定しながら、貴金属の国際的流通を論ずるようになると貨幣数量説へ移行している、と批判するが²⁾、リカードゥが投下労働量による貨幣の価値規定と並んで貨幣数量説を保持したのは、このような問題意識があったからである。かく批判するマルクスも、「貨幣の相対的価値は、資本主義的生産様式がより高く発達している国民のもとでは、それがあまり発達していない国民のもとでより小さいであろう」³⁾ と言い、生産力の発展水準の差異に対応して貨幣価値も異なるという内容で、リカードゥの問題提起を受継いでいる。

[注] 1) 次の叙述で商品の自然価値と自然価格が区別されているのは、このような含意の表われである。「外国貿易というものは、拘束されていようと、奨励されていようと、それとも自由であろうと、種々異なった諸国における生産の比較的困難のいかんにかかわらず、つねに継続されるであろう、ただそれを左右しうるのは、それらの国で諸商品が生産されうるその自然価値〔「実質的な労働価値」(I, p. 323)] ではなくてその自然価格を変更することによってだけである、そしてそのことは、貴金属の分配を変更することによってもたらされる」(I, p. 343. [] 内引用者)。

2) Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*. 武田隆夫他訳『経済学批判』岩波文庫, 225—227頁。

3) Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. 1. *Marx-Engels Werke*, Bd. 23, S. 584.

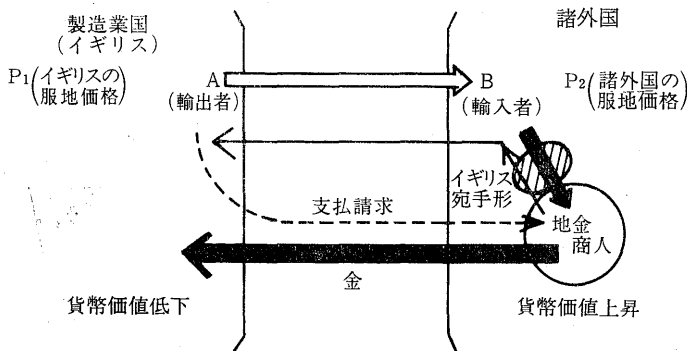
『マルクス・エンゲルス全集』大月書店、第23巻 728頁。

3. 貨幣の価値と為替相場

次に、リカドゥが貨幣の価値と為替相場を区別していること、ならびに彼の為替相場論について検討する。貨幣価値の部分的変動によって均衡が実現されることに続いて、リカドゥは次のように言う。

「このより高い貨幣の価値は為替相場によっては表示されないであろう。たとえ穀物と労働の価格が一つの国である国におけるよりも10, 20, または30パーセントだけより高いとしても、手形はひきつづいて平価で流通するかもしれない。仮定された事情のもとでは、このような価格の差異は事物の自然の秩序であって、為替相場は、製造業に卓越した国に、その穀物と労働の価格をひき上げるのに十分な貨幣量が導入されるときにのみ、平価にありうるのである。もしも諸外国が貨幣の輸出を禁止し、そしてこのような法律の遵守を首尾よく強制しようとすれば、諸外国はたしかに製造業国の穀物と労働の価格の騰貴を防ぎうるであろう。というのは、紙幣が使用されないものと仮定すれば、このような騰貴は貴金属の流入があった後にはじめて起こりうるからである。しかしこれらの国は為替相場が自国にきわめて不利となることを防ぎえないであろう。仮にイギリスがこの製造業国であって、貨幣の輸入を防ぐことが可能であるとすれば、フランス、オランダ、およびスペインにたいする為替相場は、これらの国々にとって5, 10, または20パーセントだけ不利となりうるであろう」(I, pp. 146—147)。

第4図



第4図はこの叙述を図示したものである。 P_1 , P_2 の間に利潤を保障するような格差が存在すれば、服地はイギリスから諸外国へ輸出される。服地輸入者

Bはイギリス宛手形によって、債務を弁償する。輸出者Aから地金商人に支払請求がなされると金がいギリスへ移動する。その結果貨幣価値の変化によって服地価格が変化し、 P_1 , P_2 の格差がいギリス宛手形のプレミアム（イギリスから服地を輸入し、その支払のために手形を購入すれば発生するプレミアム）に等しくなれば、服地の輸入は行われず、従って手形の需要もなくなり、為替相場は平価に戻る。つまり「為替相場は製造業に卓越した国に、その穀物と労働の価格をひき上げるのに十分な貨幣量が導入されるときのみ、平価にありうるのである」。以上の推論に基づいて、リカードゥは、両国の貨幣価値の差異（その間接的表現としての服地価格の差異）は為替相場（それは第4図  によって確められる）によっては表示されない、と言うのである¹⁾。

外国貿易を使用価値上の問題に限定した当然の結果として、リカードゥは、生産力格差に対応した最も有利な国際分業が営まれている状況を、自然状態と考える。そして生産力が変化したとき、それに応じた最適な国際分業が形成されることを *specie flow mechanism* によって示すが、そのような調整は、為替相場の変化によってではなく、貨幣価値の変化によって——しかもその部分的変動が生じることによって——実現される。貨幣価値の変化は貿易商品の価格を変化させ為替相場に影響するが、調整は為替相場の変化によってではなく、貨幣価値の変化によって行われる。*specie flow mechanism* の末尾で、リカードゥが貨幣の価値と為替相場を区別していることの意義はここにある。

ところで、貿易の流れが金の移動を要求しているにもかかわらず、諸外国が金の輸出を禁止するならば、諸外国は自然的水準を越える金をもつことになり、金は過剰の程度に応じてそれ自身の減価した表章になる。つまり価格の尺度標準の切下げが生じ、為替相場はそれに比例して諸外国に不利となり、これは決して是正されない。金の自由な移動が強制的に停止されている場合に起こるこのような結果は、過剰な不換紙幣が強制的に流通させられているときに起こる結果と同じである。リカードゥは、金が強制的に抑留されている場合に生じる事態を強制通用力をもつ紙幣の流通から抽象して考えているのであり、彼の論理に従えば、これは名目為替相場の変動である²⁾。

しかし、ここで生じる為替相場の変動は実質為替相場の変動と考えるべきで

ある。というのは、リカアドゥは specie flow mechanism の展開において、一貫して、国際間の生産力の変化が貿易に反映し輸出入が変化する、という情況から出発しており、「貿易の流れが金の流出に原動力を与えているにもかかわらず、金が諸外国に強制的に留めおかれる」というここでの想定は、諸外国がイギリスに債務を負っているにもかかわらず、金決済が禁止されている、ということであり、諸外国がイギリスに負っている債務が為替相場変動の原因となっているからである。債務決済のための金輸出を諸外国が禁止するならば、輸入者は債務支払を手形に頼らざるをえず、従って手形に対する需要には限度がなく、為替相場は諸外国に極めて不利となる。この為替相場の変動は、国際的諸支払に由来する実質為替相場の変動である。金現送がなされるならば、実質為替相場の変動は、金輸送費の範囲内に制限されるが、金の輸出が禁止されれば、輸入者はどれだけのプレミアムを支払ってもイギリス宛手形を購入しなければならず、為替相場は金現送点を越える。それは、イギリスが諸外国に支払猶予を与えるか、実質為替相場の低下による第二次的輸出促進効果が現われるまでは決して修正されない。このような歯止めのない為替相場の不利化は、不換紙幣が過剰に流通させられている場合に生じる結果と同様である。

リカアドゥは、国際的債権債務が存在するにもかかわらず、金決済が禁止されているために生じる実質為替相場の変動と、不換紙幣の過剰流通から生じる名目為替相場の変動という原理を全く異にする二つのものを、結果の同一性から同一視している。あるいは、結果の同一性から、後者の名目為替相場の原理を前者に過度に投影し、通貨の過剰という原理によって実質為替相場の変動をも説明するのである。その結果、為替相場は、各国通貨の相対的減価の割合によって一元的に説明され、不利な為替相場の是正策としては、過剰な通貨の除去が挙げられる。

「為替相場は、穀物、服地、またはなにか他の商品で貨幣の比較価値を評価することによっては、けっして確かめられるものではなくて、一国の通貨の価値をある他の国の通貨で評価することによって確かめられるのである」(I, p. 147) 3)。

「イギリスにおいて100ポンドが、オランダで101ポンド、フランスで102ポンド、そしてスペインで105ポンドを受けとる手形すなわち権利を購買しうる。その場合には、イ

ギリスとの為替相場は、オランダにとっては1パーセント、フランスにとっては2パーセント、そしてスペインにとっては5パーセントだけ不利である、と言われる。それは、通貨の水準がそれらの国々において本来そうあるべきものよりも高いことを示している、そしてこれらの国々の通貨の比較価値とイギリスのそれとは、諸国の通貨をひき去るか、あるいはイギリスの通貨を増加するかによって、ただちに平価に回復されるであろう」(I, p. 148)。

「リカードが不利な為替相場をつねに、その国にたいして為替相場が不利である一国の通貨の過剰からみちびきだしているばあい、彼は、1) 実質的為替相場と名目的為替相手を同一視しており……」⁴⁾ というマルクスの批判は以上のような内容であると思われる。リカードが初期の著作以来、『経済学原理』においても二つの為替相場を明確に区別している(I, p. 230)にもかかわらず、金決済の禁止という状況下でそれらを同一視するようになったのは、蓄蔵貨幣範疇を完全に欠落させ、流通手段として以外に貨幣が果す機能をすべて捨象し、金の過剰を不換紙幣の過剰と同一視するという貨幣数量説が保持されていたためである。

[注] 1) 貨幣の価値と為替相場を区別する同様の考えが既に1811年9月26日付J.

ミル宛書簡(VI, pp. 54—55)で述べられている。田中素香「リカードの為替相場論」(下)『下関商経論集』第20巻第3号, 1977年3月, 56—60頁。

2) 「このパラグラフでは価値という言葉が曖昧な意味をおびています。さいしょの文章では「諸商品でもって測られた貴金属の相対価値に、騰落をきたす事情はすべて、それに比例して、他の国々とのあいだの名目為替に影響を及ぼすものである」、とあるのを見ました、もし貴金属がそういう国に強制的に抑留できると仮定なさるのならば、私はそれに賛成です。——もし貴金属の通過が自由ならば、私は影響をうけるものは実質為替であると思います」(マカエロク宛, 1819年10月2日, VIII, p. 90)。

3) ここで言われている「通貨の価値」とは、「金に固有の内在的価値とは区別されて、通貨流通総量が過少であるか過剰であるかに応じて通貨が現実の章標している価値である」ことが田中素香氏によって指摘されている。田中素香, 前掲「リカードの為替相場論」(下), 68頁。

4) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857—1859*, Dietz Verlag, 1953, S. 775. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店, 1962年, (IV) 867頁。

Ⅲ. リカドゥ外国貿易論の核心

1. リカドゥ外国貿易論の核心

以上, specie flow mechanism に関するリカドゥの思考の原型を再現したが, 本節では, 外国貿易論の核心と全体の構成を明かにする。議論に先立ち, 外国貿易論は, (1)「外国貿易による価値額不変, 従って利潤率不変」命題, (2)比較生産費理論, (3) specie flow mechanism の三つの部分から成っていることを確認しておく (I, p. XVii, 編者序文参照)。

結論を先取りすれば, リカドゥ外国貿易論の核心は、外国貿易による価値額不変を主張した冒頭の一節に集約されている。外国貿易論は利潤論の一環として書かれている¹⁾。利潤率は賃銀の低下による以外は上昇せず, 賃銀の低下は生活必需品の価値低下による以外は起こらない, これがリカドゥ経済学の基本的命題である。外国貿易論もこの線上に位置する。だから彼は, 外国貿易によって低廉に輸入される商品が賃銀財でない限り, 利潤率は上昇しないと言うのである (I, p. 132)。このような考えを首尾一貫させるためには, リカドゥは, 外国貿易論の領域においてもスミス, とりわけマルサスと対決することを迫られる。つまり, 外国貿易を資本に対する追加需要と捉え, 競争論の見地から外国貿易による利潤率上昇を主張するスミス²⁾, そして, 外国貿易の拡大により一定量の輸出品と交換により多くの輸入品が獲得されることをもって一国の価値額の増大と捉え, 外国貿易によって利潤率が上昇する, と考えるマルサス³⁾を否定することによって, 「賃銀による利潤の規制」というリカドゥ体系の核心は, closed system においてだけでなく, open system にまでも貫いて, 最終的に確立される。冒頭の一節はそのための布石である。

リカドゥの論理を追跡しよう。

(1)「外国貿易の拡張は, 商品の数量したがって享楽品の総量を増大させるにはきわめて有力に貢献するであろうが, しかしけっしてただちに一国の価値額を増大させるものではない。すべての外国財貨の価値は, それらとひきかえに与えられる, わが国の土地と労働の生産物の分量によって測定されるから, われわれは, 仮に, 新市場の発見によって, わが国の財貨の一定量とひきかえに外国財貨の二倍量を取得とするとしても, よ

り大なる価値を得ないであろう」。

(2)「もしもある商人が、1000ポンドの額のイギリス財貨を購入することによって、イギリス市場で1200ポンドで売ることのできる分量の外国財貨を取得しうるものとすれば、彼は、彼の資本のこのような使用方法によって 20パーセントの利潤を取得するであろう。しかし彼の利得も、輸入商品の価値も、共に、取得された外国財貨の分量の多少によって増減することはないであろう。……いずれの場合にも、同一の価値がイギリスに輸入されるであろう。もしも50樽〔のブドウ酒〕が1200ポンド以上に売れるならば、この特定の商人の利潤は一般利潤率を超過するであろう。そして資本は自然にこの有利な貿易業に流入し、ついにはブドウ酒の価格の下落が万事を以前の水準にひき戻すであろう。価値額不変を根拠にして利潤率不変が主張されている。

利潤率不変の根拠についてさらに言う。

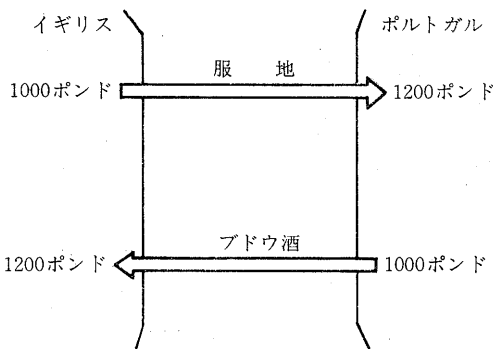
(3)「私は、穀物、服地、帽子、靴、等々の需要が減少しないかぎり、これらの商品の栽培や製造にあてられる資本が必然的に減少するであろう、ということを否認するからである。そしてもしそうだとすれば、それらの商品の価格は騰貴しないであろう。外国商品の購買にあたっては、イギリスの土地と労働の生産物の同一の、より大なる、あるいはより小なる部分のいずれかが使用されるであろう。……もしもイギリスの土地と労働の生産物のより多くが外国商品の購買に使用されるならば、その他の物の購買にはより少ししか使用されえない、それゆえに、より少ない帽子、靴、等々が要求されるにすぎないであろう。資本が靴、帽子、等々の生産から解放されると同時に、外国商品の購買に用いられる諸商品の製造には、より多くの資本が使用されるにちがいない。その結果として、すべての場合に、外国産と国産の商品を合計したものにたいする需要は、価値にかんするかぎり、その国の〔総〕収入 $(V + M)$ と資本によって制限される」(I, pp. 128—130. [] 内引用者)。

(3)の内容から検討する。リカードゥは資本量一定という最もエレメンタルな次元で外国貿易の利潤率に及ぼす影響を考えている。資本量が一定であれば生産される価値額も一定であり、その価値額によって、国内商品と外国商品に対する需要は規制される⁴⁾。変わるはその分割である。外国商品に対する需要が増大すれば、国内商品に対する需要は減少し、国内商品を生産していた資本の一部は解放され、外国商品の購買に用いられる商品の生産に向けられる。このようにして、外国商品に対する増大した需要、国内商品に対する減少

した需要に対応した供給が、諸資本の競争によってもたらされ、外国商品、国内商品の価格は旧来の水準に下落し、利潤率ももとの水準に低下する。

(3) を具体的に数字で示したのが(2)である。イギリスの輸出品を服地、貿易相手国をポルトガルとすれば、第5図のような情況が想定されている⁵⁾。イギリス商人はポルトガル商人に1000ポンドの服地を渡し、イギリス市場で1200ポンドで売れるブドウ酒を取得する。ブドウ酒が1200ポンド以上に売れる

第5図



ということは、需要のより大なる部分が外国商品に向かい、国内商品に対する需要は減少することを意味する。そうなれば、利潤率は不均等となり、国内商品を供給していた資本の一部は解放されて、服地と交換にブドウ酒を得る貿易に従事するようになる。その結果、ブドウ酒は追加供給され、その価格は1200ポンドに下落し、貿易部門の利潤率も一般的水準へ低下する⁶⁾。

リカードの推論の出発点は、資本量一定従って価値額も一定、という情況である。そして、このような情況下で貿易が行われたとしても価値額は変わらない、ということが論証されなければ、それ以後の論理は蹊く。推論の成否は、外国貿易による価値額不変の論証にかかっているのであり、(1)の「すべての外国財貨の価値は、それらとひきかえに与えられるわが国の土地と労働の生産物の分量によって測定される」という「支配労働価値説」がその論拠とされているのである。リカード外国貿易論の核心は、外国貿易による価値額不変を主張した冒頭の一節にあるというのは以上のような内容である。

- [注] 1) 中村広治, 前掲『リカドゥ体系』267頁, 吉沢芳樹「古典派経済学の完成」出口勇三編『経済学史』(四訂)ミネルヴァ書房, 1976年, 195—197頁。
- 2) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* ed. by Edwin Cannan, Vol. I, p. 95. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫(1) 279頁。
- 3) 外国貿易と利潤率との関係についてのマルサスの考えに関しては, 中村広治, 前掲書, 第2章第1節, Thomas Robert Malthus, *Principles of Political Economy Considered with a View to their Practical Application*. 小林時三郎訳『経済学原理』岩波文庫(下)第7章第8節「生産物の交換価値を増大する手段と考えられる, 国内商業および外国貿易によってひきおこされる分配について」を参照。
- 4) 生産によって需要が規制されるという点については, 中村広治, 前掲書, 第2章第3節を参照。
- 5) 『マルサス評注』(*Notes on Malthus's Principles of Political Economy*)の次の叙述が参考となる。「もし私が100ポンドの価値のある帽子を送りだし, それがフランスで105ポンドに売れ, そして100ポンドの価値のあるクラレットを受けとり, それがこの国で105ポンドに売れるとすれば, 私はあたかも105ポンドにたいして100ポンドを与えたように見え, またフランスの商人にとっては, あたかも100ポンドにたいして105ポンドを受けとったようにみえるであろうが, しかし事実上はどちらのものも同じ価値を与えかつ受けとっているのであって, 5ポンドは支出と資本の利潤を償うために追加されるものである。100ポンドが同じ期間に国内で投ぜられ, 同じ輸送費ないしはその他の種類の費用がかかるとしても, 等しく105ポンドが生みだされるであろう。そこでわれわれは外国貿易によってより望ましい商品は得たが, より高い価値の商品を得たわけではない」(II, p. 403)。
- 6) 「諸商品が独占の対象でないかぎり, それらが輸入国で販売される価格を究極的に左右するものは, 輸出国でのその自然価格である」(I, p. 375)という一節は, しばしばリカドゥの国際均衡論を示すものとして挙げられる(例えば, 小島清「リカドゥの国際均衡論」『国際経済理論の研究』東洋経済新報社, 1952年)が, これは, 諸資本の競争によってブドウ酒価格は1200ポンドに落ち着くことを言い表わしている。1200ポンドが輸出国自然価格であるというのは, 1000ポンドのブドウ酒が輸出されずにポルトガルで販売され, 同じ輸送費がかかるとすれば, 1200ポンドが生み出されるからである(注5)参照)。この一節は, 単に価格上の均衡だけでなく, 外国貿易による利潤率不変命題との関連で考えられるべきである。

2. リカドゥ外国貿易の構成

「賃銀による利潤の規制」というリカドゥ体系の基軸を窮極的に確立するものとして外国貿易論は配置されており、その核心は外国貿易による価値額不変（従って利潤率不変）の主張にある。低廉な賃銀財の輸入による以外は利潤率は上昇しないとはいえ、外国貿易は、一般に商品を低廉に輸入することによって蓄積ファンドを増大させ、資本蓄積に刺激を与える（I, pp. 131—133）。このような思考を展開するに当って、リカドゥは、生産力格差が存在する国々の間で最も有利な国際分業が行われている、という状況を前提している。すなわち彼は、外国貿易の本質たる有利な物々貿易が遂行されているという状況を想定して、それが利潤率にいかに関与するかを問題にし、それに否定的結論を出したのである。そして生産力の変化によって有利な物々貿易の遂行という状況が攪乱されたとき、それが再び確立されることを *specie flow mechanism* は示している。

すなわちリカドゥ外国貿易論は次のような構成になっている。その核心は冒頭の外国貿易による価値額不変（従って利潤率不変）命題に存在し、それを導き出す前提として有利な物々貿易の遂行という状況が設定されている。比較生産費理論はどのような国際分業が最も有利であるかを決定する原理である。そしてそのような前提された世界の実在性を保障する機構として *specie flow mechanism* が考えられている。

3. J. S. ミルによる変型

リカドゥは一般的利潤率との関係で外国貿易を考えているが、彼の問題意識が J. S. ミルによっていかに変型されたかを検討する。

周知のように、ミルは、リカドゥは貿易の方向を与えたが、商品の交換比率、すなわち貿易の利益が二国間で分割される割合を確定していない、と批判する。そして、「労働の節約から生ずる生産物の増加分が如何なる割合で二国間に分配されるか」¹⁾ がミル貿易論の中心テーマとなる。closed system において価値を決定する原理（商品の生産費）は、国際貿易には妥当しない。外国商品の価値は、その商品が生産された国における生産費には依存せず、その獲

得費用すなわち「その輸入品に対して支払いをなすために輸出される物品の生産費」²⁾に依存する。すなわち外国商品1単位に対してどれだけの国内商品を与えるかによって輸入商品の価値は決定されるのだが、この割合は生産費によってではなく、相互需要によって決定される。つまり、「ある国の生産物は、その国の輸出の総額がその国の輸入の総額に対し過不足なく支払いをなすのに必要とされるような価値をもって、他の国々の生産物と交換される」³⁾。

リカードゥの課題は、絶対的相対的生産力格差のある国々の間で貿易が行われている状況下で、それが一般的利潤率にどのように影響するかを解明することにあった。これに対して、ミルにあっては、リカードゥに存在した絶対的生産力格差の認識は消失し、問題は、両国の商品交換比率の相違から生じる利益の分け取りにのみ集中され、均衡点は、輸出入がバランスし、「国際的需要の方程式」が成立する点に求められる。リカードゥの問題関心は外国貿易がいかに一般的利潤率に作用するかにあり、その場合、外国商品と国内商品がどのような割合で交換されようとも、それは問題ではなかった。というのは、外国商品1単位に対してどれだけの量の国内商品が与えられようとも、逆に言えば、一定量の国内商品と交換に得られる外国商品の量がどれだけであろうとも、「すべての外国財貨の価値は、それらとひきかえに与えられる、わが国の土地と労働の生産物の分量によって測定されるから、われわれは、仮に、新市場の発見によって、わが国の財貨の一定量とひきかえに外国財貨の二倍量を取得するとしても、より大なる価値を得ないであろう」という論理によって、外国貿易による価値額不変、従って利潤率不変を首尾一貫して主張しうるからである。この論理が維持される限り、イギリスのラシャとポルトガルのブドウ酒の交換比率がどのようなものであっても、リカードゥの主張は維持される。このような意味で、彼が与えた1対1という交換比率は決して恣意的なものではなく、論理一貫した想定なのであり、ミル以降の批判は全く安易な批判である。検討されるべきは外国貿易による価値額不変命題の論拠とされた「支配労働価値説」の妥当性である。それに対してミルは交換比率にのみ問題を局限している。このように考えるならば、ミルは比較生産費理論を変型したのみではなく、リカードゥ外国貿易論のエッセンスを全く理解しておらず、外国貿易論の中心問題

をリカードとは全く異なったところに移行させている、と言える。そしてそれ以降のブルジョア貿易理論は、つねにミルの延長線上で展開されており、二国二財モデルではなく、多数国多数財モデルになれば、諸商品の交換比率はどうなるか⁴⁾、あるいはまた、相互需要の均衡をもたらす要因として需要の価格弾力性（価格効果）だけでなく所得効果を考慮すればどうか⁵⁾、また貿易商品だけでなく国内商品を導入すればどうか⁶⁾、さらに収穫不変ではなく、収穫逡減を仮定しなければ、均衡は実現されないのではないか⁷⁾、という方向で発展してきたのである。

- [注] 1) John Stuart Mill, *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, 1836. 末永茂喜訳『経済学試論集』岩波文庫, 12頁。
- 2) John Stuart Mill, *Principles of Political Economy with Some of their Applications to Social Philosophy*, 1848, 2Vols., Vol. I, p. 121. 末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫(3) 278頁。
- 3) *ibid.*, p. 133, 訳 294—295頁。
- 4) J. S. ミル以降のブルジョア貿易理論の発展を追跡されている小柴徹修氏は、多数国多数財モデルの最終的結論において、結局のところ、「最終的均衡は、各国の相互需要が均等する点でもたらされ、不均衡がある限り、各国における商品の相対価格の変化をもたらす」と言われる。小柴徹修「国際分業に関する覚書」(3)『東北学院大論集』第68号, 1975年9月, 31頁。
- 5) J. S. ミルは、交易条件決定の不確実性というウィリアム・ソーントンの批判に対して、交易条件は貿易の開始に伴い、一国の産業の方向が変化することによって解放される資本（転換資本）の大きさによって規定されることを述べているが、これは、交易条件決定要因としての需要の価格弾力性（価格効果）と区別された両国需要の量という意味で、所得効果であることが、小島清氏によって指摘されている。小島清, 前掲『国際経済理論の研究』122—132頁。
- 6) この点については、J. Viner, *Studies in the Theory of International Trade*, New York, 1937, pp. 323—326 を参照。
- 7) R. F. Harrod, *International Economics* 2nd ed., London, 1939. 藤井茂訳『国際経済学』（改訂版）実業之日本社, 1958年, 第2章。

IV. 国際経済における均衡

1. 外国貿易と利潤率

リカードの問題提起を後方の体系へ発展させるために、二つの問題につい

て検討する。

国際経済における資本主義固有の経済法則の解明という課題の困難は、そこでは国民経済と国民経済の関係が問題になり、さらに、それら諸国民経済は、一定の方向へ、一定の速度で発展しているのではなく、不均等発展をしていることにある。国際間で生産力の不均等発展が生じたとき、それに対応して社会的分業が再編される動きはつねに存在する。しかしその過程で、国際間の生産力格差が縮小し、調和的世界が実現されるのではない。逆に、世界経済はその格差を固定し拡大しながら発展してきた。このような現実の世界経済の動きをある時点で裁断し、断面図をとれば、不断に不均等発展を経験している国民経済相互間に法則的に貫いている関係を純粹に示す世界を想定することができる。「国際経済における均衡」という言葉は以上のような内容を含んでいる。

国民経済と国民経済の関係をトータルに概念把握する場合、基本的範疇は「国民的生産力」であると考ええる。それは、国民経済内部においては時間的継起の中で現われるその格差が、国際間では同一時点において空間的に併存しているからである。リカドゥは、国際間に生産力の絶対的格差が存在するにもかかわらず、すべての国は外国貿易によって使用価値上の利益を得るが、価値額従って利潤率は不変である、という内容で基本的には国民的生産力水準の意義を認識した。ところがミルにあっては国民的生産力の認識は消失し、問題はすべて、両国の商品交換比率の相違から生じる貿易による利益の分け取りに局限される。このようなリカドゥからミルの方向でのブルジョア貿易理論の発展に対して、リカドゥからマルクスの方で貿易論を再構築する試みが国際価値論である。この立場からすれば、まず外国貿易と利潤率との関係が検討されねばならない。というのは、リカドゥは利潤理論の一環として外国貿易を考えているからである。この問題は貿易論展開の一つの枢軸である。スミスは、外国貿易を資本に対する追加需要と捉え、外国貿易によって利潤率は上昇すると考えた。リカドゥは、輸入品の価値は交換に与えられる輸出品の価値によって決定されるという「支配労働価値説」を論拠にして、外国貿易による価値額不変、従って利潤率不変を主張した。リカドゥからマルクスの方で外国貿易論を発展させる立場からすれば、外国貿易と利潤率の問題は、需要供給論

あるいは「支配労働価値説」に基いてではなく、労働価値論を基礎にして解明されるべきである。外国貿易についてのマルクスの叙述には、(1)価値法則のモディフィケーションの命題¹⁾と、(2)貿易に投じられた資本があげる超過利潤は利潤率の均等化には参加するが、その平均化は旧来の水準ではなく、より高い水準への平均化である、というリカード批判があるが²⁾、これらは、以上のような関連で理解されるべきである。すなわち、国際間における価値法則の作用(価値法則のモディフィケーション)を基礎にして、外国貿易によって利潤率がどのような影響を受けるかを理論化することが第一の課題である。

マルクスが費用価格の生産価格化という問題を考慮することなく、安易に、外国貿易によって一般的利潤率は上昇する、と言ったのに対して、その問題を考慮すれば、輸出超過利潤は全般的価格上昇をもたらすだけで、一般的利潤率は上昇せず、全般的価格上昇のため相対的に低廉化した輸入財の輸入によってはじめて一般的利潤率は上昇する、という主張がなされているが³⁾、問題は、一般的利潤率が上昇するか、不変であるかにあるのではなく、それを労働価値論に基いて論証することにある。以上のように主張する論者が、この問題をどこまで意識的に価値法則のモディフィケーションとの関連で考えているか疑問である。

[注] 1) 『資本論』第1巻, 原文 SS. 583—584, 訳728—729頁。

2) 『資本論』第3巻, 原文 SS. 247—248, 訳298—299頁。

3) 柴田固弘「貿易利潤と一般的利潤率——奢侈品部門と生産価格——」『金沢大学法文学部論集』第22号, 1975年, 同「貿易利潤と一般的利潤率——価値額をめぐるリカードとマルクス——」同上誌第23号, 1976年, 同「貿易利潤と一般的利潤率——吉村正晴氏の見解について——」同上誌第24号, 1977年, 同「貿易の超過利潤の本質と源泉と作用について」同上誌第25号, 1978年, 同「諸国における貨幣の価値とその変動について」同上誌第26号, 1979年, 同「貿易と利潤率について」『金沢大学経済論集』第10, 11合併号, 1973年3月, 同「貿易利潤と一般的利潤率——木下悦二氏の見解について——」同上誌第14号, 1977年3月, 同「貿易と利潤率にかんするノート——名和統一氏の見解について——」同上誌第14号, 同「貿易の超過利潤実現のメカニズムについて」同上誌第15号, 1978年3月, 同「貿易の超過利潤と特別剰余価値」同上誌第16号, 1979年3月, 同「貿易の超過利潤と一般的利潤率——後進国の場合——」同上誌第17号, 1980年3月。また海野八尋「一般的利

潤率と外国貿易について——柴田助教授の最近の研究——」同上誌第14号、1977年3月、本山美彦「比較生産費説・国際価値論・貿易利潤」(中)『経済論叢』第125巻第3号、1980年3月、(下)同上誌第125巻第5号、1980年5月、において柴田氏の所説が検討されている。

2. 国際経済における均衡

国際間における生産力格差に対応した最も有利な国際分業が形成されている状態を想定して、そのような情況下で外国貿易によって利潤率がいかなる影響を受けるかにリカードゥ外国貿易論の中心テーマがあった。「国際経済における均衡」という視点から言えば、リカードゥはその時々を生産力に対応した最も利益のある国際分業が営まれている状態を国際間の均衡と理解している。いわば彼は、使用価値範疇によって「国際経済における均衡」を考えている。そして生産力に不均等な変化が生じたとき、それに対応した新たな均衡を実現すべく *specie flow mechanism* が作用する。この意味で、*specie flow mechanism* を貿易収支均衡論としてだけ理解するのは不十分である。

ミル以降のブルジョア貿易理論においては、利潤率との関係で外国貿易を考える視点は完全に欠落する。その結果、リカードゥにとってはどうしてもよかった交易条件決定論、換言すれば外国貿易による使用価値上の利益の分割が中心テーマとなる。問題がこのように設定されるならば、リカードゥに存在した国民的生産力格差の認識は不必要となり、異なる国民的労働と国民的労働の比較という作業も不必要となる。その結果、比較生産費理論は、両国の交換比率に差異さえあれば外国貿易は行われ、いずれの国も利益を得ることができる、と定式化される。そしてマーシャルの代表的包 (*representative bales*) ¹⁾ に代表される実質費用概念へと労働価値論の稀薄化が進み、さらに外国貿易による利益の説明には実質費用概念すら不必要であり、機会費用で十分である、とまで換骨奪胎される²⁾。問題が交易条件の決定に限られると、*specie flow mechanism* も、相互需要の均等を確立し、安定的な交易条件を実現するメカニズムとして理解される。このように、ミル以降、貿易理論はリカードゥから遠ざかりつつ発展してきたのだが、「国際経済における均衡」という問題意識からすれば、ミル以降もリカードゥと同様に使用価値視点から均衡を考えている。つま

り貿易による利益の分割の均衡をもって、国際間における均衡と考えている。

だが、国際間における生産力の不均等発展とその均衡化というリカードの問題提起に対しては、価値範疇によって答えられるべきだと考える。生産力の不均等発展の調整は、単に為替相場の変動によってではなく、産業構造の変化も含めて国民経済全体で遂行されると考えられる。そのことは、この均衡化によってこれまでとは異なった新たな水準に移行した新たな価値体系がもたらされる、すなわち、このような調整過程は価値という座標系³⁾そのものを变化させることを意味する。価値はまず市場価格の循環的変動の中心として定義できる。そしてその中心の絶対的大きさは社会的必要労働時間によって決定される、とした点に労働価値論の最大の長所がある。価値から市場価格が乖離するのは、社会的分業編成に不均衡が存在し、それが価格に反映されるからである。そしてこのような価格の変動を媒介にして、社会的分業の不均衡は絶えず調整される。逆に言えば、このような調整メカニズムが存在するからこそ、価値の実在性を主張しうる。つまり、価値は一定の均衡的な社会的分業編成を前提して語りうるのであり、その社会的分業編成はあくまで国民経済という枠の中で存在する。従って価値という範疇を語りうるのは国民経済内部においてであり、世界市場全体を包摂する単一座標系は設定されないことから、異なる価値体系と価値体系の比較という問題が生じる。そして生産力の不均等発展は、この価値体系相互間の関係を変化させるのである。

そこで課題は、生産力発展の不均等による価値体系相互の関係の変化ということの内容の確定であるが、木下悦二氏の国際価値論に注目したい。木下氏によれば、この調整過程は、生産力が国々で不均等に発展する現実の過程の中で、「貨幣価値の相対的相違」の変化を通じる動態的調整過程である⁴⁾。この背後には氏の国際価値論がある。その核心は次のように要約できる。異なる国民的労働と国民的労働との関係は、等価形態に立つ商品の生産力格差によって決定される。金が終局的に等価形態に固着すれば、国民的労働相互の関係は、金生産労働の生産力格差、つまり金一単位が代表する国民的労働の關係に集約される。すなわち、金生産労働の生産力が国民的生産力水準を機能的に代表し、金という使用価値的同一性の背後に不等労働量交換という事態が蔽い隠されてし

まう⁵⁾。ここで木下氏は、貨幣価値の相対的相違が国民的生産力水準の格差に一致するという国民経済相互の均衡の世界を設定し、そこに法則的に貫く不等労働量交換という関係を明かにされているのであり、これこそ木下国際価値論のエッセンスであると考える。

この理論に基けば、生産力の不均等発展は、貨幣価値に国民的生産力水準の発展程度に応じた変化がもたらされることによって調整される。木下氏はこの両者が一致するメカニズムを次のように説明される。(1)貨幣価値が国民的生産力水準以上に高い場合。その国の物価水準は相対的に低く、輸出が増加し、輸入が減少するため金が流入する。この金はこの国の輸出品によってきわめて有利に獲得され、国内の金の代表する国民的価値よりも少い国民的価値の対価として流入する。その結果割高な貨幣価値は調整される。(2)貨幣価値が国民的生産力水準に比べ過小の場合。その国の相対的に高い物価水準のため、輸入超過となり、対外決済用の金に対する需要が増大し、金にプレミアムがつくことによって金の過小評価が修正される⁶⁾。

(1)の場合、木下氏は、為替相場によって規制される非産金国間の金の流れ(特殊の運動)と産金国から世界各国の流通に入ってゆく金の流れ(一般的運動)とを区別することなく、一国が一定量の国民的労働と交換により多くの金を獲得しうることをもって、貨幣価値の過大評価は修正される、と言われる。ここで木下氏は、リカードウの、貨幣価値の「全商業世界に共通な変動」と「特定の国々で貨幣がこうむる部分的変動」という区別を受継がれ、貨幣価値の部分的変動によって均衡化が達成されるメカニズムを、全世界に共通の変動をもたらず金の一般的運動とは区別される特殊の運動によって説明されているのだと思われる⁷⁾。(2)の金にプレミアムがつき、貨幣価値の過小評価が修正される、というのも、貨幣数量説とは異なるメカニズムによって貨幣価値の部分的変動を説明する試みである。しかし(2)において変化するのは金の市場価格であり、金(貨幣)の価値とは何の関係もない。問題は正に貨幣の価値なのである。

(1)に関して次のことを指摘したい。国際間における生産力の不均等な変化は、貨幣価値の部分的変動によって調整され、そしてこの貨幣価値の部分的

変動は、金の特殊的運動によって引き起こされるのであれば、この問題は世界市場恐慌との関連で考えられねばならない。

「一般的な恐慌が燃え尽きてしまえば、金銀は再び——その生産国からの新産貴金属の流入は別として——以前に各国にそれぞれの準備金として均衡を保って存在していたときと同じ割合で配分される。そのほかの事情が変わらないかぎり、それぞれの国にある金銀の相対的な量は、その国が世界市場で果たす役割によって規定されているであろう。金銀は正常な分け前よりも大きな分け前をもっていた国から流れ出て、他方の国に流れこむ。このような流入流出の運動は、ただ、いろいろな国々の準備金のあいだへの金銀の金銀の元来の配分を回復するだけである。とはいえ、この再配分はいろいろな事情の作用に媒介されているのであって、それらの事情は為替相場を論ずる際に言及される。正常な配分が回復されれば、——この点を越えて——、まず増大が現われ、次には再び流出が現われる」⁸⁾。

この一節は、リカードの問題提起をマルクスが受継いだことの表われとして木下氏によっても挙げられているが⁹⁾、ここでマルクスが貴金属配分の均衡の回復を恐慌と関連させて論じていることが注目されるべきである。為替相場によって規制される金の特殊的運動は、発達した信用制度の下では、その軸心としての準備金に作用する。そしてその作用が最も集中的に現われるのは恐慌による対外金流出入を通じてである。だからこそ貨幣価値の部分的変動の問題を受継いだマルクスは、恐慌によって回復される各国の準備金の均衡に言及したのである。木下氏の言われる、貨幣価値の相対的相違の変化を通じる動態的調整メカニズムは、準備金の動きに媒介されるのであり、従って世界恐慌という循環メカニズムによつ補強されねばならない、と考える。従って課題は、複雑な循環過程の中で起こる金の国際移動を通じて、生産力の不均等発展に対応した新たな均衡、新たな水準に移行した価値体系がいかにして創出されるかを理論化することにある。

近年、現実の世界経済についての具体的な表象を確定し、それを説明しうる理論を構築すべきである、という問題提起がなされているが¹⁰⁾、貿易論における「国民的生産力」範疇の決定的重要性を強調することが、これに対する筆者のさしあたりの回答である。それは、自立的と評価するにせよ、従属的と評

価するにせよ、低開発国に資本主義が根づき、これら諸国が資本主義的方向で発展する可能性が生まれてきており、従って「国民的生産力」という範疇を語りうる状況が、現実の世界経済の中に創り出されてきている、と考えるからである。また先進国は工業製品に特化し、低開発国は農産物に特化する、ということとは存在するが、それは、「国民的生産力」を担う具体的、使用価値的内容であり、そのようなヨリ具体的次元での分析の重要性はいささかも否定するものではないが、先進国と低開発国との関係が国民的生産力水準の圧倒的格差によって影響を受けているとするならば、そのような具体的、使用価値的特殊性を捨象した次元での理論化を否定するのではなく、これこそまず果されるべき課題であると考ええる。

- (注) 1) 「代表的「包」、すなわちその各々が一国の労働(種々の質の)と資本の一定の結合的投下を表わす包」 Alfred Maschl, *Money Credit and Commerce*, Macmillan and Co., 1924, p. 157.
- 2) Gottfried Haberler, *Der Internationale Handel, Theorie der Weltwirtschaftlichen Zusammenhänge sowie Darstellung und Analyse der Ansssenhandels-politik*, Berlin, 1933. 松井清・岡倉伯士訳『国際貿易論』有斐閣, 1937年, 第13章。
- 3) これは木下氏の表現である。『資本主義と外国貿易』有斐閣, 1953年, 1頁。
- 4) 木下悦二『国際経済の理論』有斐閣, 1979年, 171—172頁。
- 5) 木下悦二『資本主義と外国貿易』140—141頁。
- 6) 木下悦二, 同上書, 149—150頁。
- 7) 金の特殊的運動によって貨幣価値の部分的変動を説明する考えは、相互需要説に基いてはいるが、J. S. ミルにもある。彼は商品としての金の運動と、債務を支払うための、交換の媒介物としての金の運動とを区別し、非産金国(たとえばイギリス)における金の価値は、イギリス商品に対する産金国の需要と比較した、金に対するイギリスの需要に依存するだけでなく、それ以外の諸国との間の国際需要の方程式にも依存する、と言う。「イギリスが地金をより安い比率をもって獲得することができるようになる、イギリス商品に対する需要の増加なるものが、鉱業諸国における需要である必要は、決してない。イギリスは、鉱業諸国へ向かっては何ものをも輸出しなくても、もしもそれ以外の諸国においてイギリスの財貨に対する十分に強い需要があり、これが迂回的に鉱業諸国からきた金銀をもって支払われるならば、やはり鉱業諸国から最も低い条件をもって地金を入手する国となるであろう」。

- J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, p. 146. 前掲訳329頁。
- 8) 『資本論』第3卷, 原文 SS. 584—585, 訳735頁。
- 9) 木下悦二『国際経済の理論』104—105頁。
- 10) 本山美彦「新貿易理論の胎動」『経済評論』1979年12月, 同「比較生産費
説・国際価値論・貿易利潤」(上)『経済論叢』第125巻第1, 2号, 1980年
1, 2月(中)同上誌第125巻第3号, 1980年, 3月(下)同上誌第125巻,
第5号, 1980年5月。